

「山勘（ヤマカン）」

増山雄三

戦国時代、武田信玄の伝説的軍師として名を馳せ、武田の五名臣の一人に数えられた武将に、「山本勘助（一四八三～一五六一）」という人物がいたが、確実性の高い史料ではその存在が疑問視されている。

それでも、彼の生涯は、江戸時代の前期に成立した「甲陽軍鑑」を元にとすると、各地に残る家伝や伝承も、江戸時代の軍談作者によって脚色され、天才肌の「軍師山本勘助像」が形成され、いわば、武蔵坊弁慶と同じような「英雄物語」であるというのが、史家のあいだでは通説になっている。

しかし、元禄年間作成の「武功雑記」によると、勘助の子供が学のある僧で、自分の親である山本勘助の話を作成し、高坂弾正の作と偽って甲陽軍鑑と名付けた、作り物と断じ

るなどと、存在を疑われる事もあり、勘助は軍師などではなく、信玄の単なる家臣にすぎなかった、と断じている。

甲陽軍鑑にある彼の生誕地は、駿河国富士郡山本（現在の静岡県富士宮市山本）とあって、生まれてすぐ三河国牛窪城主牧野氏の養子に入り、二十才で武者修行の旅に出て、十年の間に、中国に四国それに九州と関東の諸国を遍歴し、京流兵法を会得しながら、築城術や陣取りの戦法を極めた。

後に、勘助が武田信玄に仕えたとき、諸国の情勢として、毛利元就や大内義隆の将才について語っているが、三十七才になって、駿河の今川義元に仕官を願ったが、義元は、彼が色黒で容貌も醜いうえ隻眼で、身には無数の傷があり、足は不自由で指も揃ってなかった異相を嫌って、召し抱えなかった。

さらに、小物一人も連れぬ貧しい牢人で、城も持った事もなく、兵を率いた事もない彼が、兵法を極めたなどという大言壮語も、大

法螺であると誇り、また勘助が当時流行の新当流ではなく京流である事も災いし、仕官が叶わず、牢人のまま九年を過ごした。

それでも、勘助が兵法家で築城術も手腕がある。と聞いた、武田家の重臣だった板倉信方が、信玄に彼を推挙し、天文十二年（一五四三年）に、武田家は知行百貫という、牢人としては破格の待遇で召抱える事にしたので、勘助は甲府へ赴くことにした。

信玄は、勘助と対面すると、城取りや諸国の情勢を話しあい、彼の知識の深さに感心して、深く信頼するようになり、この年、信玄が信濃へ侵攻した時、勘助は九つの城を落す大功をたて、その才を証明した。

翌年、信玄は信濃国諏訪へ侵攻して、領主の諏訪領重を下して自害させたが、領重には美貌の姫がいて、重臣たちが揃って強く反対するのを退け、彼女を側室に迎え諏訪御兩人と呼び、翌年に生まれた男の子が、最後の武田家当主となる「武田勝頼」である。

天文十六年（一五四七年）、信玄は上田原の戦いで村上義清と決戦し、重臣の板垣信方を失うなど苦戦したが、勘助の献策により、村上は越後へ走り上杉謙信を頼り、以後、謙信はしばしば北信濃の川中島へ侵攻して、信玄と戦火を交える事になる。

それに備えるべく信玄は、勘助に命じて北信濃に海津城を築かせ、城主となった高坂昌信は、勘助が縄張りしたこの城を「武略の粹が極められている」と語ったというが、その四年後の永禄四年（一五六一年）、謙信は、一万三千の兵を率いて川中島に出陣して妻女山に入り、海津城を脅かした。

両軍は数日に及んで対峙するが、軍議の席で、武田家重臣たちは決戦を主張するが、信玄は慎重で、勘助に謙信を打ち破る作戦を立案するよう命じた。

そこで勘助は、軍勢を二手に分け、別動隊を夜陰に乗じて妻女山へ接近させ、夜明けと共に攻め、これに驚いた上杉勢が山を下りた

ところを、本隊が挟撃して殲滅する作戦を献策したが、これは、啄木鳥が嘴で木を叩き、出てきた虫を食らうことに似ている事から、後にこれが「啄木鳥戦法」といわれた。

信玄はこの策を容れて、高坂昌信率いる兵一万二千の別動隊を編成し、妻女山に向かわせ、自身は兵八千を率い八幡原に陣を敷き、逃げ出してくる筈の上杉勢を待受けたが、謙信はこの策を見抜いていて、高坂が妻女山を攻めた時、そこはもぬけの殻だった。

夜明けの濃霧が腫れた八幡原で、信玄と勘助は、いる筈のない上杉勢一万三千が、彼らの眼前に展開しているのを目にして驚くうちに、謙信は信玄を討ち取るべく、車懸りの陣をとり武田勢に猛攻をかけたきた。

これに抗すべく信玄は、鶴翼の陣をしくものの、武田勢は押しまくられてしまって、武田家の武将が相次いで討ち死にしていくなが、その中の一人に「勘助」もいた。

その有様について、江戸時代の軍記物であ

る「武田三代軍略」によれば、「勘助は己の
献策の失敗によって、全軍崩壊の危機にある
責に死を決意し、僅かな家来と敵中に突入し
て、獅子奮迅の働きをするが、家来達は次々
に討死してしまった。それでも、勘助は満身
創痍になりながらも、大太刀を振るって戦い
続けるが、上杉家の猛将柿崎景家の手勢に取
り囲まれ、四方八方から槍を撃ちこまれ、落
馬したところを、坂木磯八に首を取られた。
享年六十九才」と書かれている。
とはいえ、勘助らの必死の防戦により、信
玄は謙信の猛攻を持ちこたえるうち、乱戦の
最中に謙信は、ただ一騎で手薄になった信玄
の本陣に切り込み、馬上から床机に座った信
玄に斬りかかったが、信玄は軍配を持って、
辛うじてこれを凌いだ。
ようやく別働隊の高坂勢が駆けつけ、上杉
勢の側面を衝いたところ、不利を悟った謙信
は兵を引き、戦国時代未曾有の激戦だったと
いう、「川中島の戦い」は終わったが、この両

雄の決戦を甲陽年鑑は、前半は謙信の勝ち、後半は信玄の勝ちとしているが、さらに、当て推量を「山勘（ヤマカン）」というが、それは、山本勘助の名前がその由来である、と
いっているのは面白い。

明治時代になると、古典的な軍記物語に対する史料批判が起り、東大の田中教授が「甲陽年鑑考」を著し、その史料性を否定し、そこに登場する「軍師山本勘助」は、身分の低い一兵卒だとし、また甲陽年鑑は、一介の僧侶にすぎない勘助の子が、父を誇大に活躍させて、一兵卒に過ぎない勘助が、武田家の軍師とされてしまったと断じているが、ただ勘助の实在性については疑っていない。

歴史史学の大家である田中の見解は、権威のあるもので、活動はおろか、名前自体が他の史料にない勘助の活動も史実とは考えられなくなり、昭和三十六年刊行の「武田信玄」でも、山本勘助は架空の人物としている。

令和三年一月